

2021 年度事業報告

学校法人いっづな学園

I. 法人事務局事業報告

1. 2021 年度の概要

本年度は、新型コロナウイルス感染症が少し落ち着いたり、新たなウイルスが出現して感染が再拡大したりした年となった。しかしながら、消毒や健康チェックなどの様々な対策および保護者の方々のご協力もあって、前年度に比べて充実した教育活動を行うことができた。

感染症対策の補助金や教育の質の向上のための補助金、みどりの少年団の活動費などの活用により、学校幼稚園ともに施設整備が充実した。

2. 事業報告

1) グリーン・ヒルズ小学校の国際バカロレア認定にむけ、学園理念に新たな一文を追加し、目指す姿をより明確にし、世界に発信できるよう以下のとおり変更した。

「いっづなの自然の中で五感を育み、感性豊かな人を育てます」

「自らが幸せな人生を選び取る、自律した人を育てます」

「人が持つ違いを違いとして理解し、

世界の多様な文化、伝統、考え方を尊重し、共生できる人を育てます」

2) 2021 年 10 月にグリーン・ヒルズ小学校が国際バカロレアの候補校となった。

3) グリーン・ヒルズ中学校校舎として利用するために、グリーン・ヒルズ小学校近くの双日株式会社所有「飯綱山荘」を購入取得。校舎として利用するためには改築が必要となるため、当面はセミナーハウスとして利用する予定。

3) こどもの森幼稚園からグリーン・ヒルズ小学校へ3名の園児が就学することとなり、学園設置校のつながりに光明が見られた。グリーン・ヒルズ小学校が国際バカロレアの候補校となったことも、新たな児童の確保に繋がった。また、在籍者に対しては、説明を丁寧に行うことにより、ほとんどの保護者から理解が得られた。

4) 「みらいの教育推進室」をグリーン・ヒルズ内に設置し、現在までに「こどもの森まちはのほいくえん(仮称)」の設立について検討を継続している。また、学園の教育理念やカリキュラムについての検討も継続する。

5) 「親子自然教室」は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて次年度以降へ延期とした。

6) 子育て館「野愛」を利用した子育て世帯への支援として、親子ヨガ教室を開催。冬の子育て応援団「発育相談」は感染症拡大のため中止とした。

7) 飯綱高原スキー場跡地「づなっち広場」は、飯綱高原観光協会が中心となって寄付活動などを行い、学園としても保護者に案内を配布するなどの支援を行った。また、教育活動において、活動場所としての利用を行った。

3. 次年度への検討課題

引き続き、こどもの森幼稚園からグリーン・ヒルズ小学校、グリーン・ヒルズ小学校から中学校への入学生確保のために、学園教職員で情報を共有し、可能な対策を一つずつ積み上げていくとともに、教育理念、方針の再確認とその実現に向けた具体的な改革について検討を進める。

II. こどもの森幼稚園事業報告

1. 概要

本年度も、新型コロナウイルス感染症による、行事開催の制限や縮小などの影響はあった。しかしながら、信州型自然保育の特化型施設である強みを活かして、野外での活動を中心に教育事業を展開し、保護者参加行事や子育て支援なども可能な限り開催した。

2021年度に行った事業は以下のとおりである。

- 1) 自然保育を活動の中心において、小学校への接続も視野に入れた幼児教育を行った。
- 2) つぼみ子育てサロンでは様々な参加形態を提供するため、昨年に引き続き1DAY 会員を継続した。また、つぼみ参加者が幼稚園活動を見る機会を確保し、幼稚園入園へ繋がるように活動場所を野愛中心とした。
- 3) 感染症対策を行いながら、未就園児対象のオープン DAY を春と秋それぞれ2回、合計4回開催。また、親子ヨガの子育て支援も行った。
- 4) 教育支援体制整備事業の補助金を利用して、アクティブコーポレーション(清掃業者)に園舎の全館清掃と消毒を依頼し、清潔な園児の活動空間を確保した。

2. 2021年度の教育における重点目標と達成度

本年度の重点目標は以下のとおりで、学校評価の結果としては保護者、教員ともに評価B(比較的達成できた)となった。

- 1) 自然体験を中心においた教育の充実を図る
- 2) 衣食住をテーマとした活動を行う
- 3) 園児、保護者及び教職員の個々の考えを大事にし、お互いの意見を尊重しながら主体的・対話的により良い人間関係の構築を目指す

3. 2021年度事業の報告

本年度の主な事業計画の遂行について、以下のとおり報告する。

1) 自然体験を中心においた教育の提供

コロナ感染症対策も行いながら、年間を通して野外を中心に活動を行った。これにより、子ども達の自然の観察力・体力・人間関係の構築力などが向上したと感じた。また、自然の中で培った経験を活かし、それを表現、製作活動へつなげていくことが出来た。

2) テーマを「衣食住」に設定した活動

田植えや園内の畑を通した食育は例年通り行った。しかし、学校評価の結果では、今年度の重点目標の中でも保護者、教員ともに評価が最も低く、目標が達成できたとはいえない。特に、大豆を通した食育に関しては、園長の提案が3月末ということもあり、保護者、教職員と話し合いをする機会を十分に持たず、活動が停滞した。多様な考えを持っている集団の中で、全員が同じ思いを持つことは大変難しいということが体現された。

3) 人間関係の構築

子どもたちの人間関係を丁寧にとり、お互いの違いを知って理解して認め合うように子どもたちに伝えて指導した結果、仲間としての絆が深まった。特に、年長児の卒園劇でその成果が発揮され、飯縄や戸隠の伝説、様々な動物たちや空想の生き物などが、お互いを認め合い皆の命が大切なものであることを伝える内容となった。

4) 自然教育課程の明確化

今年度、事業達成には至っていない。引き続き、こどもの森幼稚園の教育カリキュラムや保育マニュアルを見直し、様々な資料を参考にしながら再構築を行う。

5) 子育て支援の充実

子育て館「野愛(のあ)」では、つぼみ子育てサロンが中心に活用した。つぼみと異なる活動としては、6月に親子ヨガを開催。2月に予定していた子育て相談会は感染症拡大により中止とした。その他の「野愛」の活用として、幼稚園保護者の会議や誕生会の出し物の練習などが挙げられる。

6) 設備・機器の整備

園庭及び園庭遊具の整備、園庭遊具用のハーネス・ヘルメットの整備については、感染症拡大により保護者にお手伝いいただくことができなかつたり、器具の選定が滞っていたりして整備に繋がらなかった。

河川財団の助成金を利用し、川遊び時や野外活動時に使用するための無線機 10 台を整備した。

4. 次年度への検討課題

- 1) 以下の事業内容について、検討、計画、実施に繋げるため、指導者または相談者が必要である。そのため、学園の創設者である内田幸一氏にスーパーバイザーを依頼する。
 - ①園庭及び園庭遊具の整備、園庭遊具用のハーネス・ヘルメット選定と整備
 - ②定期的(月に一回程度)に園内研修を開催して職員の質の向上を図る
 - ③こどもの森幼稚園の教育カリキュラムの構築
- 2) 次年度は職員体制(人事)が大きく変わるので、今までこどもの森幼稚園の大切にしてきたものと今の時代にあったニーズや考えを精査し、こどもの森幼稚園の新たなスタートとなるように、園長、副園長が連携しながら、子どもを中心に保護者、職員間とのコミュニケーションを密にすることが必要である。それぞれに認め合って譲り合っていくことを忘れずに子どもにも大人にも向き合っていくことを大切に、それにより園児、保護者及び教職員の個々の考えやお互いの意見を尊重しながら主体的・対話的により良い人間関係の構築を目指す。
- 3) 今年度、保護者とのコミュニティツールの必要性が顕著となったため、来年度はICT補助金を利用してシステムの導入を行う。システムは、保護者や外部への情報発信も行えるように検討し、別紙のシステムの導入を検討する。なお、導入にあたりシステムを利用するための機器の整備も行う。また、外部への情報発信は園児の集客や広報を兼ねるため、システムに連動されているSNSの活用について理事会の理解を得る。
- 4) 今年度、つぼみ会員数が伸び悩むとともに 2022 年度の入園者も激減した。つぼみ子育てサロンの会員から入園に繋がると、園児も保護者も幼稚園活動への順応性が高いため、つぼみ会員の確保に向けて SNS などの外部発信に力を入れたい。
- 5) 子育て館「野愛」の活用について、引き続き、一般に開かれた子育てに関する企画を立案する。また、保護者会(どんぐりの会)主催の保護者の班活動などを通して、子育て中の親子の親睦を図るための活動場所として活用していく。
- 6) 今年度に引き続き河川財団の助成金を活かし、園庭横の沢の整備を行う。

Ⅲ.グリーン・ヒルズ小学校事業報告

1. 概要

新入生 1 名転入生 5 名を迎え、24 名となり、昨年度に続き 2 学年ごとの 3 クラス編成とした。

学園の目指す姿である、学園理念に 3 項目を加えたことにより、グリーン・ヒルズ小学校目標もより明確なものとなった。学園理念を目標として、自然の中で体験を育む「五感」、自分自身で考え行動する「自律」そして、違いを認め合いよりよい社会をつくっていく「共生」をキーワードとして、国際バカロレア(以下 IB)のプライマリーイヤープログラム(PYP)の認定に向け準備を進めてきた。合わせて、新学習指導要領に基づくカリキュラム作りに向けて経験豊かなアドバイザーを迎え、教員の研修を行った。

2. 2021 年度の活動内容の報告

1)自然体験活動と「探求プロジェクト」による探究力の育成

自然体験活動を単なる体験でなく、そこから新たな気付き、疑問、改善点など、児童一人ひとりが考えその先の行動や考えにつなげられるよう、探求プロジェクトに向けて動き始めた。教職員の研修会を通してようやく一歩を踏み出したところではあるが、IB の銃の学習者像など目指す姿やテーマが示され、そこに向けて組み立てを考え、研究をすすめた。

2)基礎学習の充実

2 学年の複式学級の中で、学習指導要領に基づく教科学習のをどのように進めていくか、アドバイザーの方々の指導の下、単元の扱いの整理を始めた。今後 IB のカリキュラムとの関係を整えていくことが不十分で今後の課題である。

3) 国際バカロレアの認定に向けて

4 月に田中が校長研修を、市川氏がコーディネーター研修を受講し、IB の PYP 候補校への申請を行い、10 月 6 日に、1 条校として長野県で初の候補校に認定された。また、1 月には教職員 13 名が PYP の教員研修を受講した。2 月にも講師の先生に来校頂き、実際の授業をみて指導を頂いた。

4)国際社会での発信力の育成

英語力、コミュニケーション力の伸長を目指し、ネイティブスピーカーによる授業を取り入れた。自然に英語が使える環境となるよう継続してい。

IV.グリーン・ヒルズ中学校

1. 概要

新入生 3 名を迎えたものの、家庭の事情等により年度途中で 1 名が転出し、在籍 4 名の少人数となって大きな課題を残した。

2年継続の花王みどりの森財団の助成金を頂き、学校ビオトープ再生事業に取り組んだ。少ない人数ながらも、小学生や保護者・地域の方々の協力により、池が完成し、周辺の植物環境の整備を継続して行うことになった。

2 .2021 年度の活動内容の報告

1)自然体験活動と「プロジェクト」による探究力の育成

周辺の自然観察と学校ビオトープ再生から、生態系のつながりを学び、自らができるところを考え行動していくことを目的として活動を進めた。しかしながら、少ない人数で作業に終始してしまい、探求的活動への深まりが不十分であった。

2)基礎学習の充実

教科ごとの基礎学習は、個人授業になることが多く、個別の学びの良さはあったものの、学び合いや実験など集団での学び場をつくるのが困難であった。

3)進路指導

3年生1名の進路については、家庭の方針によりコロナの感染への危惧から3学期は自宅学習となり、密な連携が取れなかった。しかしながら、松本国際高校のバカロレアコースへ進学し、グリーン・ヒルズでのプロジェクト学習を発展させることが期待できる。早い段階から、生徒、家庭との懇談を実施しそれぞれの願いを具現化できるよう、進路指導の在り方を検討していく必要がある。

V.グリーン・ヒルズ小学校、中学校共通項目

1.児童、生徒募集について

新型コロナウイルス感染症の拡大の中、授業への体験参加による検定は実施が困難であり、第2回からはオンラインによる授業と面接で検定を実施した。これにより、遠隔地からの受験がしやすくなった半面、受験生の特性や持っている力を判断することが難しかった。オンラインで実施した説明会も参加者も多く、また保護者会が主体となって実施した気軽な移住促進の会などオンラインならではの広報ができたことは、入学者の増加につながった。

2.GIGA スクールについて

12月よりICT支援員に來校いただき、校内整備をすすめた。教職員の業務の軽減に向け、チャットでの情報交換や資料の共有、オンライン会議等の活用を進めた。

3.施設設備の整備(小学校、中学校共通)

- 1) 西側校舎(寮)の廊下にドアを設置し、寮玄関を使用して出入りから校舎と分けた使用が可能となった。今後は、コミュニティールームとしての保護者、地域の方のスクールコミュニティーとしての利用を考えていきたい。
- 2) セミナーハウスの取得
現校舎東側に、双日株式会社信濃山荘を購入した。中学校としての利用を念頭に置いているが、今後の活用準備を進める。
- 3) マイクロバスが修理に費用がかかるため、廃車とした。大型バスとハイエースでの送迎となり、リンゴ園など道路が狭い場所への行き来の対応が難しかった。

4.グリーン・ヒルズの次年度への課題(小学校、中学校共通)

- 1) 学園の理念と合わせてIBの使命を具現化した学習者像に向けて、グリーン・ヒルズでつけていく力をより具体的に示し、教員間はもとより子ども、保護者とも共通の理解を深めていく必要がある。
- 2) 児童生徒の確保が最大の課題である。幼稚園、小学校、中学校の連携を図るとともに、いっぴな学園の教育をアピールできるよう、広報活動にむけてホームページを再考するとともに学校案内などパンフレットの見直しと効果的な配布を進める。
- 3) 教職員の充実を図ったが、教育課程、児童生徒理解の研究研修の確保が課題である。合わせて、より一層の教員間の情報共有と連携が重要である。
- 4) 現校舎及びセミナーハウスの管理や使用について運営計画の作成が必要である。
- 5) 生徒数の見込みと合わせて、車両、施設、備品(机イス、パソコン・タブレット)などの整備計画の策定を進める。